

# PDF Tool

月曜日

2025年6月30日

第1号

「うん」

「そうだと。だから、まいにち神さまにお礼を言うがいいよ」

「うん」

「ええ、こいつはつまらないなと思います。おれが、栗や松だけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじゃア、おれは、引き合わないなあ。」

「そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはこびたではありませんか。こないだうなをぬすみやがったあのごん狐めが、まだいたずらをしに来たな。」

「そのあくる日も、栗をもちて、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄《なわ》をなつておりました。それで、家の裏口から、こっそり中へはいりました。」

「兵十は立ちあがって、納屋《なや》にかけた火縄銃《ひなわじゅう》をとって、火薬をつめました。そして足音をのばせてちかよって、今戸口を出ようとすると、ドンと、うちました。兵十はかきよって来たおれを見た。兵十はかきよって来たおれの中を見て、土間《どま》に栗が、かためておいてあるのが目につきました。「おや」と兵十は、びっくりしてごん目を落しました。」

「ごん、お前《まい》だったのか。いつも栗をくれたのは」

「ごん、ぐったりと目をつぶったまは、うなずきました。兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口《つつぐち》から細く出ていました。」

「おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しよにかえってきます。二人の話をきこうと思って、ついてきました。兵十の影法師《かげぼうし》をふみふみきました。」

「おれは、死んだらお母さんにお礼《お礼》だ。おれは、お母さんにお礼を言おうと思った。その晩、お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。」

「お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。」

「お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。」

「お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。」

「お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。」

「お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。お母さんにお礼を言おうと思った。」

## ごん狐

### 新美南吉

#### ANTENNA HOUSE

これは、私《わたし》が小さいときに、村の茂平《もへい》というおじいさんから聞いたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、中山《なかやま》というところに小さなお城があって、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐《ぎつね》」という狐がいました。一人《ひとり》ぼっちの小狐で、しだ【#「しだ」に傍点】の一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、菜種《なたね》がら【#「がら」に傍点】の、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家《ひやくしようや》の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとして、いたり、いろんなことをしました。

或《ある》秋《あき》のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間《あいだ》、ごん狐、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

「兵十《ひょうじゅう》は、はりきり【#「はりきり」に傍点】網の一ぱいしげった森の中を、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木きれなどが、ごちやごちやはらっていましたが、でもとこころで、白いものがきらきら光っています。それは、ふと【#「ふと」に傍点】の腹や、大きなきす【#「きす」に傍点】の腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなきやきすを、ごみごみにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼって、水の中へ入れました。」

「兵十《ひょうじゅう》は、はりきり【#「はりきり」に傍点】網をゆすぶっていました。はちきすをした顔の横【#「横」に傍点】つちよつに、まるい萩の葉が、一まい、大きな黒子《ほくろ》《みたいに入ばりついでいました。」

「兵十《ひょうじゅう》は、はりきり【#「はりきり」に傍点】網をゆすぶっていました。はちきすをした顔の横【#「横」に傍点】つちよつに、まるい萩の葉が、一まい、大きな黒子《ほくろ》《みたいに入ばりついでいました。」

「兵十《ひょうじゅう》は、はりきり【#「はりきり」に傍点】網をゆすぶっていました。はちきすをした顔の横【#「横」に傍点】つちよつに、まるい萩の葉が、一まい、大きな黒子《ほくろ》《みたいに入ばりついでいました。」

「兵十《ひょうじゅう》は、はりきり【#「はりきり」に傍点】網をゆすぶっていました。はちきすをした顔の横【#「横」に傍点】つちよつに、まるい萩の葉が、一まい、大きな黒子《ほくろ》《みたいに入ばりついでいました。」

兵十はそれから、びくをもって川から上《あが》りびくを土手《どて》においとして、何をさがしにか、川上《かわかみ》の方へかけていきました。

## PDF Tool

### 新美南吉

#### ANTENNA HOUSE

兵十がいなくなると、ごん狐、びよと草の中からとび出して、びくのそばへかけつきました。ちよと、いたずらがしたくなったのです。ごん狐、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきり【#「はりきり」に傍点】網のかかっているところより下手《しもて》の川の中を目がけて、ぼんぼんげこみしました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。



「ごん狐、びよと草の中からとび出して、びくのそばへかけつきました。ちよと、いたずらがしたくなったのです。ごん狐、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきり【#「はりきり」に傍点】網のかかっているところより下手《しもて》の川の中を目がけて、ぼんぼんげこみしました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。」



# ごん狐

## 新美南吉

「うわアぬ  
すと狐め」  
と、どなり  
たてまし  
た。ごん  
は、びく  
りしてとび  
あがりまし  
た。うなぎ  
をふりすて  
てにげよう  
としました  
が、うなぎ

### ANTENNA HOUSE

ほら穴の近くの、はん [#「はん」に傍点] の木の下で  
ふりかえて見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずし  
て穴のそとの、草の葉の上のせておきました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやがて来ますと、いつの間《ま》にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢《おおぜい》の人があつまっています

「兵十のお母は、床《とこ》について、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり [#「はりきり」に傍点] 網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。



だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままお母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

# ごん狐

## 新美南吉



### ANTENNA HOUSE

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しょにかえていきます。ごんは、二人の話をきこうと思って、ついていきました。兵十の影法師《かげぼうし》をふみふみきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

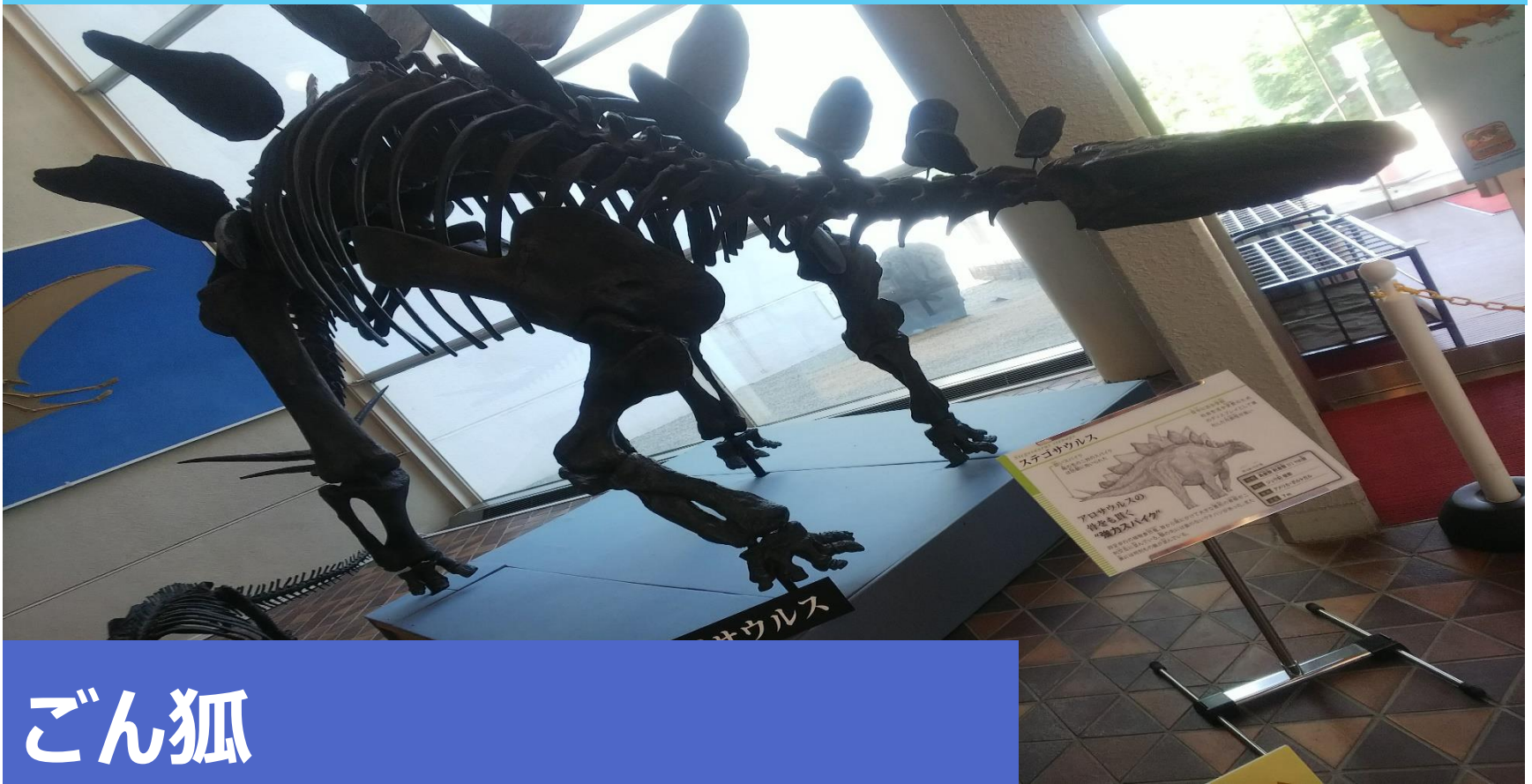
「うん」

「ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはおれをいわないで、神さまにおれをいうんじやア、おれは、引き合わないなあ。」

「うん」

「そうだとち。だから、まいにち神さまにおれを言うがいよ」

「そうかなあ」



# ごん狐

## 新美南吉

「せはん、死んだのせはんとお母の世《ふね》だ」

### ANTENNA HOUSE

お午《ひる》がすぎると、**ごん狐**、村の墓地へ行って、六地藏《ろくじぞう》さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦《やねがわら》が光っています。墓地には、ひがん花《ばな》が、赤い布《きれ》のようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘《かね》が鳴って来ました。葬式の出る合図《あいず》です。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声《はなしごえ》も近くなりました。葬列は墓地へはいて来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

**ごん狐**のびあがって見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌《いはい》をささげています。いつもは、赤いさつま芋《いも》みたいな元気の良い顔が、きょうは何かしおれていました。

兵十は今まで、おっ母と二人《ふたり》きりで、負いらくらしをしていました。おっ母が死んでしまっつては、もう一人ぼっちでした。

兵十が、赤い井戸のところまで、妻をといでいました。

「兵十のおっ母は、床《とこ》についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり【#「はりきり」に傍点】綱をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おっ母にうなぎを食べさせることができなかつた。そのまもおっ母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだらう。ちよッ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

その晩、**ごん狐**、穴の中で考えました。

「いわしをおくれ。」と言いました。いわし売《うり》は、いわしのかごをつんだ車を、道はたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいりました。**ごん狐**そのすきまに、かごの中から、五、六びきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向《むか》ってかけまじりました。途中の坂の上でふりかえって見ますと、兵十がまだ、井戸のうしろで妻をとごころのが小さく見えました。

「いわしのやすうりだ。いきのいいいわしだ。」  
**ごん狐** その、いせいのいい声のする方へ走っていきましました。と、弥助《やすけ》のおかみさんが、裏口から、

# ごん狐

## 新美南吉

青空文庫作成ファイル

そのあくる日も**ごん狐**、栗をもって、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄《なわ》をなっていました。それで**ごん狐**家の裏口から、こっそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな

「ようし。」

兵十は立ちあがって、納屋《なや》にかけてある火縄銃《ひなわじゆ》をとって、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちよよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。**ごん狐**、ぱたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると、土間《どま》に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。

「ごん、お前《まえ》だったのか。いつも栗をくれたのは」

**ごん狐**、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をぱたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店  
 1996（平成8）年7月16日発行第1刷 1997（平成9）年7月15日発行第2刷



初出：「赤い鳥 復刊第三巻第一号」  
 1932（昭和7）年1月号

